富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Human Development, University of Toyama

創刊号（通巻23号）
（2007年３月31日発行）

佐伯眞人先生画（前富山大学教授）

センターニュース創刊号（通巻23号）　目次

０２　巻頭言　地域の核としてのセンター
０３　提言　「心と教育の相談室」の果たした役割と展望
０４　報告　第５回発達と臨床の心理学講座
現職の先生方を対象とした「ベーシック・グループ・エンカウンターの体験」
０５　報告　第６回発達と臨床の心理学講座
子どもを育む親支援のあり方―親ができること･教師ができること
０６　報告　今年度の「共同研究プロジェクト」
寄稿　内地留学４ヶ月を終えて
０７-1 寄稿　オンリーワン探しで自己アピール
０７-2 寄稿　教員採用試験突破を目指して
０８　学園通信　幼稚園では、小学校では
０９　学園通信　中学校では、養護学校では
１０　報告　ビジュアルトライアスロン２００６
１１　報告　講演「エコロジーは人間を救えるか」
１２　報告　国際理解教育・開発教育研修会
１３　報告　子どもとのふれあい体験
１４　報告　富山県教育委員会との連携・「学級担任論」/「学びのアシスト」事業
１５　報告　教大協北陸地区会、第69・70回教育実践研究関連センター協議会
１６　業務報告　平成１８年度の実践センターの主な行事

巻頭言

地域の核としてのセンター

センター長　市瀬 和義

2006年はいくつか大きなことがあった。まず佐伯先生が去られ、新しく田尻信一先生がおみえになった。田尻先生には学習環境研究部門のリーダーとして中心的な仕事をしていただいた。子どもとのふれあい体験や附属との共同研究、それにもうひとつ大きなことは、富山県教育委員会との包括的連携のひとつとして「学びのアシスト」の推進役を担っていただいた。全く分らない最初の年であったので、さぞかし大変であったと思う。

それから、とても大きなこととしては、長年センターの客員教授としてご尽力いただいた日俣順子先生がこの３月をもって辞められることである。日俣先生は７年もの間、教育臨床研究部門で、不登校など問題をかかえた子どもたちと親の教育相談にかかわってこられた。数多くの件数をこなし、着実に成果をあげられてきた。地域からの期待に十分応えられてきた。また、依頼を受けた学校に出向いての指導も精力的にこなして来られた。さらに各種講演、公開講座など、その活躍は多岐にわたる。さらには、教師をめざす学生たちに、志願票の書き方、面接・模擬授業などにおいて、非常に分りやすく、心に訴える指導をされた。いつも、時間を忘れ、センターに遅くまで残って教育相談をされていたこと、ニコニコと細やかな表情で熱心に仕事をしていただいたこと、心より感謝し、お礼を申し上げる。

さらに、本多信昭先生、齊藤昭先生には、昨年同様客員教授として、教員をめざす学生の指導をしていただいた。メールなどに見られるていねいな指導が実を結び、合格者が増えている。

さて、教育実践センターから人間発達科学研究実践総合センターと名前が変わってから１年半になる。持続可能な地域連携をめざして、大きく前進してきた。

富山県教育委員会との包括的連携事業も大きく進んだ。内地留学生もたくさん受け入れ、その発表会を行って、現職の先生方が大きく成長してきている。富山県教育委員会からもお褒めの言葉をいただいた。また、センター教員は客員教授として富山県総合教育センターに派遣された。

センター紀要は今年から名前をあらため、富山大学人間発達科学部附属人間発達科学実践総合センター紀要「教育実践研究」となった。教育実践とつけたのはこだわりがある。現場の教師は日々忙しくて論文などなかなか書く暇がない。しかし、どこに行っても自分の追究できるものがあれば、それが核となって生きる視点、考える視点ができるはずだ。そのことを是非望みたい。

センターで行った公開講座もたくさんの人が受講した。とりわけ臨床関係は人気が高く皆それぞれに真剣な態度であった。今後も地域や現場の要求を取り入れ地域の核としてのセンターをめざしていきたい。

昨年のセンターニュースで私は、持続可能な活動ということを述べた。活動持続可能とは奇をてらうものではない。センター関連のある会議で、教育委員会との連携がなかなかうまくいかないことが話題になったとき、うまくいっている大学では、とにかく実務者同士で頻繁に会議をもってよく話し合うことで解決したことを教えられた。何でも思ったことをいい合うそうである。腹を割って話すとはそういうことをいうのかもしれない。

地域の核になるには互いに無理のない、相互にメリットのあることを目指していくことが肝要である。そのことを慌てず、じっくりと探りながら、よりよいセンターの在り方を考えていきたいと思う。

提　言　「心と教育の相談室」の果たした役割と展望

センター客員教授　日俣 順子

「心と教育の相談室」が開設されて７年になろうとしている。私は、開設と同時に客員教授として富山大学に招いて頂き、相談室と共に歩んできた。相談室は、対象を子どもの問題に悩む保護者や、教師、そして子どもたち自身として広く市民に開かれたものとしてスタートした。

大学が市民に開放された教育相談室を持つ意味をこれまでのあゆみを振り返って、考えてみたい。また、その成果と問題点、そして今後の展望にも触れることができればと思う。

不登校、いじめ問題など、子どもの心の問題に対して果たした役割

今、子どもたちを巡る問題は様々であるが、不登校、いじめ問題など子どもの心の問題は、長期にわたる点や、命にかかわるものを含む点で深刻さは際だっている。その影響は、将来にわたって尾を引く点でも、丁寧で慎重な対応が求められる。各学校では、全教員が管理職や、生徒指導主事を中心として組織的にあたっている。そして、カウンセリング指導員やスクールカウンセラーが、子どもたち個々にあたり、全力を尽くしている。また、児童相談所や各市町村の教育センターや児童館など、相談に駆け込める施設は張り巡らされている。それぞれの施設は保護者の相談にあたり子どもの保護や救済に手を差しのべている。

ここで、大学の研究実践総合センター「心と教育の相談室」がどんな独自の役割を果たしうるかは、問われることであろう。教員としての体験、そしていくつかの相談機関での相談員としての体験を持つ私は、現在スクールカウンセラーをも兼任していることから、それぞれの苦悩がわかり、それぞれが連携を深める困難さも体験している。そうした多面的見地から、研究実践総合センター「心と教育の相談室」の果たしてきた役割を挙げるとすれば次のことが挙げられるだろう。

①　ここ７年間で延べ千回を超す相談への関与、クライエントへの継続的な支援による問題の解決。
②　ケースを通して担任及び学校へのスーパーバイザーとしての支援。担任の成長への寄与。
③　ケースを通して学校のコンサルテーションに参加し、事例研修を援助。
④　ケースを通して学校のカウンセリング講座への出前援助。
⑤　心理臨床を学ぶ学生へのケース提供。学生の臨床経験の機会提供。
⑥　現職大学院生及び内地留学生に対してケースを通しての現職教育の機会提供。

一般市民へのサービスとして①は、機能している。②～④及び⑥は学校との連携、学校への支援として機能したわけである。⑤、⑥は、学生・院生への研究・実習機会提供として機能している。

大きな社会問題でもある子どもたちの心の問題に対して、学校・教師の対処能力の向上が求められている。

こうして、教師に対してケースを通して研修の機会を提供することは、強力な支援として働いているとみていいだろう。

今後の展望

今後子どもの心の問題はますます複雑で解決に困難を極めていくことが予想される。その解決に臨床心理士など心の専門家に委ねることはもちろんであるが、学校で子どもに直接かかわる教師の温かいカウンセリングマインドの醸成や問題への対応能力の向上が求められていくだろう。

「心と教育の相談室」がこれまで以上にケースを受理し、誠実に保護者と子どもの心に添って解決に向けていく実績を重ね、信頼を得ていくことが、学校との連携の絆を深めていくことになるだろう。そのことが、現職教員の力量向上に寄与し、学生や院生の実践力向上につながるだろう。

プレイルームから学生と戯れる元気になった子どもの声がもれてくる。母親の安堵の表情がことのほか輝いて見える。こうして学校への再登校を果たしていく姿を嬉しく見守るこの頃である。

報　告

第５回　発達と臨床の心理学講座

現職の先生方を対象とした「ベーシック・グループ・エンカウンターの体験」

センター助教授　稲垣 応顕

教育臨床研究部門は、平成18年７月１日（土）の終日、現職の先生方を対象とした「第５回発達と臨床の心理学講座　ベーシック・グループ・エンカウンター（ＢＧＥ）の体験」を開催した。講師には、我が国でも本テーマにおける第一人者ともいえる琉球大学教授の松浦光和先生を招いた。

昨今、学校教育現場において構成的グループ・エンカウンター（ＳＧＥ）は、その知名度を上げ実践も行なわれている。しかし、それが生まれてきた前身としてＢＥＧがある。そのねらいは、"真に良好な人間関係作りの体験"であり、良好な人間関係はどのようなプロセスをたどり作られていくのかを再体験することである。これを心理学講座として取り上げ、先生方に学級の円滑な人間関係作りに生かしてもらうことが意図であった。実習を伴う講座であったため、あらかじめ参加人数を制限していたが、当日は管理職についている先生も含め、27名が集まった。

午前中、松浦先生はまず、講義としてＢＥＧの理論的背景、人間関係の形成プロセス、よりよい人間関係に不可欠な要素としての自己受容と他者受容、などについて話された。またその後、ＢＧＥが初体験という参加者が多かったことから、ＢＥＧとＳＧＥをつなぐ演習として、「108便」というエクササイズを取り上げられた。これは、アラスカ上空で飛行機がエンジントラブルを起し、氷原に不時着したという設定が示される。そして、飛行機の乗客10名に対し、片道10日かかるエスキモーの村へ助けを求めに行くにあたり、誰を同行させ誰をその場に残すかを決定していくという課題が提示されるのである。乗客は、小学生から70歳を越える方まで、男女も混合している。資料として、乗客10名の概要と"何故自分は生きるのか"についての簡単なコメントが書かれた紙が配られる。このエクササイズのねらいは、人を選ぶことの難しさと心地悪さ、それでも選ばなければならない際の決断力、換言すればリーダーシップ、そして他者と仲良くすることの大切さ、を実感するよう促すところにあった。

一方、昼食をはさんだ午後には、松浦先生がファシリテータ（カウンセリングの分野での言い方である。リーダーではなく、世話役というほどの意味で用いられる）となり、ＢＧＥの体験が行なわれた。ファシリテータの「みなさん、椅子を持ってこの辺で円を作って座りましょうか。」＜円が出来、参加者が着席する＞「それでは、始めましょう」で始まった体験であるが、その後、ファシリテータはニコニコとうなずきながら見守るだけで何も言わない。自己紹介の仲介さえしない。体験では、参加した誰しもが何となくの居心地の悪さを感じている中で、誰かの「お互いに、自己紹介しませんか」の発声があり、ぎこちなさを含みつつ、若干の身の上（近況報告的な）話を交えた自己紹介やそれに対する質疑応答、互いのうなづきや、やわらかな笑いが起こり、互いに何となくの親しみ感が生じてきたようであった。

時間の制約と体験講座の意味合いから、演習はここで修了した。ＢＧＥの本領である人間関係の深まりまではたどり着けなかったものの、どの参加者の顔にもやわらかな微笑があった。

報　告

第６回　発達と臨床の心理学講座

「子どもを育む親支援のあり方―
親ができること･教師ができること」

センター教授　尾崎 康子

教育臨床研究部門では、「子どもを育む親支援のあり方―親ができること･教師ができること」をメインテーマに掲げ、２回シリーズの公開講座で行った。従来、学校における問題行動に対しては、子どもを対象に教育的心理的配慮を行うだけであったが、昨今では、保護者への対応も迫られるようになった。それは、子どもの問題に対処するためには、教師と保護者が協働して取り組むことが大変有効であることが指摘されるようになったからである。一方、保護者も、一昔前は、子どものことは学校にまかせきりであったが、最近では、保護者も教師と緊密に連携して子どもの問題にあたることを求めるようになってきた。しかし、教師と保護者の立場が大きく異なるため、両者の間に考えや意見の食い違いが起こっているのも現状である。そこで、親と保護者が、子どもの well-being という同じ目的のもとに、如何に協働して取り組むことができるかについて本講座で議論を深めた。今回、富山県内の小中高等学校や養護学校の教師及び市民の方々を対象に参加者を募ったところ、１回目は104名、２回目は94名と定員を上回る参加があり、親支援に対する関心の高さが伺われた。また、研修内容についてアンケートを実施したところ、専門的で最前線の内容が研修できてよかった、教師と保護者とのよりよい関係について理解できたという声が多数寄せられた。

１回目（平成18年11月18日）　講師：アルクラブ「大阪アスペの会」ディレクター　高橋和子先生

テーマは、「高機能自閉症に対する乳幼児から成人までの一貫した支援」であった。講師の高橋先生は、高機能自閉症の専門家であり、高機能自閉症のご子息をお持ちの保護者でもある。高機能自閉症に関する最前線の研究や教育方法の講義とともに、親ができる発達支援についてご自分の体験を元に具体的な話がなされた。

２回目（平成18年12月２日）　講師：富山大学人間発達科学部客員教授　日俣順子先生

テーマは、「学校における教師と保護者とのよりよい関係作り－子ども支援と家族支援」であった。講師の日俣先生は、長年、教師として学校現場における教育相談に関わってこられた。また、当センターの「心と教育の相談室」では多くの母親の相談に携わっていただいた。このように、学校の教師と保護者の両者を十分に理解した立場から、教師と保護者のよりよい連携と協働について講義がなされた。

報　告　今年度の「共同研究プロジェクト」

センター教授　田尻 信一

学部（人間発達科学部）と附属学校園（附属幼稚園・小学校・中学校・養護学校）との共同プロジェクトの歩みも、平成18年度で６年目を迎えた。今年度の共同プロジェクトでは、野平慎二助教授がとりまとめ役となられ、「情報教育」、「国際理解教育」、「社会科教育」、「幼小連携」、「教職」、「生活・総合」、「理科教育」、「交流」、「学校保健」、「道徳教育」、「先端研究の教育利用」の11グループに、学部16名、附属幼稚園７名、小学校13名、中学校７名、養護学校12名の計55名（延べ人数）の教員が参加した。

今年度は、学部改組の伴い、これまで共同プロジェクトを推進してきた「学部および附属学校園共同研究プロジェクト運営委員会」が附属学校委員会に吸収されるなど、組織上の大きな変更があった。このような激動の中にもかかわらず、野平先生の緻密な運営のお陰で、共同プロジェクトは混乱なく実施することができた。また、昨年の９グループ31名（延べ人数）に比べ、今年は11グループ55名に増加・拡大するなど、学部と附属学校園の連携の深まりを感じさせる結果となった。今年度の共同プロジェクトは、学部と附属学校園の日常的な教育や研究を深めていく上で成果があった年と言える。

今年度、合同研究発表会の実施が検討されたが、学部や附属学校園各校の行事予定の調整が難しく断念することになった。学部と附属学校園の連携をさらに深めていくためには、合同研究発表会の実現は大切なことと思われる。今後も、実現に向けて検討していく必要があろう。

寄　稿　内地留学４ヶ月を終えて

内地留学研究生（富山市立岩瀬中学校・教諭）　竹脇 孝志

やわらかな日射しと心地よい秋風を感じる10月に研修がスタートし、足早に4ヶ月が過ぎた。開始した当初の印象は、授業やゼミを通して学ぶ事に新鮮さを感じるとともに、心理学やカウンセリングに強く興味をもつことはできたものの、その内容を消化するのに精一杯というところであった。また、自分が研究生として毎日、新しい事を学べる喜びの中、この半年間で何をなせばよいのかという思いでいっぱいであった。

幸い、現場にはない、じっくり学ぶ時間を与えていただいたおかげで、様々な文献を紐解いたり、数々の聴講をさせていただいたりすることから、これまでの自分の教育活動や子どもたちとの関わりをゆっくりと振り返ることができた。これまで出会った子どもたとの様々な場面が頭をよぎり、「あの子たちはどうしているだろう。自分は何をしてあげられたであろうか。」という思いがわき出てきた。日々の慌ただしさに追い立てられ、教師としての自分に対峙することすらしてこなかったことに恥ずかしい思いもした。

日々の講義やゼミでは大学側の諸先生方に懇切丁寧にご指導をいただき、感謝の気持ちでいっぱいである。カウンセリングをテーマに、教師として、人としての心のあり方について思いをめぐらすことができたことが、何よりも大きな収穫であり今後の教育活動の糧となっていくであろう。今後さらなる研鑽を積んでいきたい。

（＊竹脇氏には１月末に執筆して頂いた。編集記）

寄　稿

オンリーワン探しで自己アピール

センター客員教授　本多　信昭

ある日、ある学生がｅメールで２回目の「自己アピール」の添削を依頼してきました。私は“鉄は熱いうちに鍛て！”の鉄則に習いすぐに返事を出します。

添削　この（第一）段落全体ですが具体性に欠けます。そんなことがあったのか、もう少し聞いてみたいな、と思わせるにはどうしたらよいでしょう。
前の段落で教員志望のきっかけを説明し、ここで○○県の特質と関連させたいと考えているようです。養老先生を最初に持ってくる手法はどうか?　短い文であればあるほど具体的なあなたが出てこないとパンチがない文章になります。

指導　※１　○○県が欲しい教員というのはどんな人でしょう。
※２　今まで特に力を入れて取り組んできたことは　→　箇条書きで羅列を
※３　自分の個性とは?　自分の長所とは?
※１～３をまとめると○○県への自己PRが見えてくるのではないでしょうか。
※４　個性や長所はいつも表に出てきません。自分が特に力を入れて取り組んだとき、現れると思います。失敗したとき、悲しい出来事に出会ったとき、個性や長所の芽ができるとも考えます。もう少し自分を見つめ直してください。
※　この文章を直しても君らしいアピールにはならないと思いますが、どうでしょうか。
※　前の文章とも比較してください。後の方がよいとは限りません。できればそうあって欲しいのですが。これは文章は練れば練るほど良くなるはずという持論からです。考えが浅いと良くはなりません。評価は自分で読んでみると分かると思いますが。次回に期待ですね。

限られた字数の中で心を打つ文章は、自身の体験から発した表現しかないと考える私は、こんなやりとりで自分探しのお手伝いをしています。

教員採用試験突破を目指して

センター客員教授　齊藤　　昭

本年度、「就職ガイダンス」において教職を目指す学生に対して、学校現場の話をしたり、教員採用試験に向けての面接や模擬授業等にかかわる指導などを行ったりした。特に、５月から６月にかけては、７月ごろから全国各地で実施される教員採用試験に向けての最後の仕上げの機会となっている。また、10月からは、次年度からの教員採用試験に向けて、教育実習を終えてあらためて教職への心構えをしっかりもたせたり、教職の魅力について話したりする機会として取り組んできた。

この就職ガイダンスを担当して、何よりも期待するのは教職に対する強い願いである。志願票、面接、模擬授業などを通して、学生の教職への思いを聞くことも多くあるが、何よりも目指す教師像を明確にもってほしいものである。前期に行う就職ガイダンスでは、目の前の教員採用試験に向けて最終的な時期でもあるからそれなりに意志がはっきりと感じられるが、それでも、まだ、自分の心の不安定さが感じられる。つまり、自分が教師に向いているかどうかという不安である。この不安に打ち勝たない限り、教員採用試験を突破することは難しいように思える。ぜひとも教員になりたいという意欲が感じられるようにしてほしい。

また、後期の就職ガイダンスでは、前期以上に、教職に対する不安をもつ学生が多い。教育実習を終えて、うまく授業を進めることができなかったことから来る不安も多く感じられる。学生には、教育実習を通しての自分の成長を自分が行った授業の中で見つけるように話した。

教員採用試験を突破するには、多くの要素が絡み合っていると思うが、何よりもこの就職ガイダンスを活用し多くの情報を得てほしい。そして、先にも述べたように教職に対する熱い思いを大切にしてほしいものである。

学園通信

幼稚園では

附属幼稚園教諭・校内教頭　廣田 仁美

今年度は６月に日本生活科・総合的学習教育学会第15回全国大会「とやま・射水大会」、そして10月に保育フォーラムと２度の研究発表の場がありました。

まず日本生活科・総合的学習教育学会では、テーマ『問い直そう！生活・総合の存在意義』のもとに、幼稚園の教育課程の中で毎日の保育をどのように積み重ねているかということ、また保育を行う際に子どもの内面をどのようにとらえていくかなどを視点としながら公開保育、協議会を行いました。

また本園の保育フォーラムでは、『集団の中で育つ関係性』というテーマで研究の歩みを報告しました。180余名の参加者の皆様からは遊びの中で見られた子どもの姿や保育者のかかわりについての温かい読み取りや、日頃の実践で悩んでいることと重ねての話など貴重なご意見をいただきました。また県内の研究協力者の方は、対象児の内面を考察しながら遊びの様子やかかわりの様子を報告していただきました。そして富山大学の研究協力者の先生方からは保育全般、関係性の育ちのとらえ方に関する指導助言をしていただき、大変学びの多い会となりました。

午後からは研究報告の後、富山大学人間発達科学部助教授小林真先生の司会で、富山大学人間発達科学部附属小学校教諭松井昌美先生から生活科の実践と幼小のつながりの様子を、富山大学人間発達科学部教授尾崎康子先生からは乳児期から始まる人生における関係性の発達や愛着の大切さを、富山福祉短期大学教授宮﨑州弘先生からは子どもの関係性をはぐくむカリキュラムについての話をいただき、大変充実したシンポジウムとなりました。

今年度の学びを、今後の研究にさらに生かしていきたいと考えております。

小学校では

～対話する子供を目指して（４年度）～

附属小学校教諭　城岡 恭子

「対話する子供を目指して」を研究主題に掲げてから、第４年目を迎えました。昨年度までの研究で、対話する子供が育つ学習過程は、７つの段階を通ることが分かってきました。また、各段階には、それぞれの意味や役割があることも明らかになってきました。18年度は、副題「子供が対話をひらく構造を明らかにする」を設け、「互いの考えを知る段階」（４段階）から「自分と異なる考えとの出会いに心が揺さぶられる段階」（５段階）、まさに子供が対話をひらく場面に焦点を当てて研究しています。今年度も、各教科等の研究授業において、米田先生や岡崎先生をはじめ、多くの学部の先生方に指導をいただきました。

対話の大前提である「心の健康」では、稲垣先生によるコンサルテーションを実施しました。子供の健康状態のとらえ方や教師の支援の在り方について教えていただいたことを、対話の土壌となる学級づくりに生かしています。

「対話のツール」としてのＩＴでは、高橋先生や学部の学生の協力により、コンピュータ管理システムを導入しました。今年度は、図書室とコンピュータ室の壁を取り除き、ワンフロアーに改造したことにより、調べ学習がより効果的に行えるようになりました。

来年度は、いよいよ、対話研究の最終年度を迎えます。今までの研究の成果をまとめると共に、６年間でどのように対話する子供を育てるかについて、今後も研究や実践を積み重ねていきたいと考えています。

中学校では

附属中学校教諭・研究部主任　京角 輝彦

中学校では、「主体性の高まりをめざす課題学習」を研究主題に掲げ、教育研究活動を積み重ねています。副題を「確かな学力を身につけさせるための指導と評価」として４年になりました。６月の教育研究協議会では、学力をどのようにして身につけさせるのか、そのための指導と評価はどうあればよいのか等、これまでの研究・実践の成果を、授業や部会を通して公開し、教科ごとに講演会やワークショップも開催しました。多数の方々に参会していただき、充実した研究協議会になりました。また、校内では互見授業を重ねて各教科の取り組みについて研修を行いました。今後も研究・実践を積み重ねていきたいと考えています。

子供たちの心の健康を高めていくため、個々の生徒や学級集団を理解し、具体的な対応策を考える機会として、今年度も人間発達科学部の稲垣応顕先生を招いて、カウンセリング研修会（６回）を実施しました。生徒をさまざまな角度から理解したり、適切な指導方法について考えたり、教員からの相談に対して具体的な手だてを示唆していただいたりと、とても有意義な研修会になっています。稲垣先生には、この他、温かい人間関係づくりをめざした生徒会保健委員会を中心としたピア・サポート活動や、個に応じた柔軟な対応のためのハートケアフレンド等へも支援・指導していただいています。また保護者からの相談に応じる機会として、稲垣先生をはじめ４名の先生方にお越しいただき、「子育て相談会」（計４日間）を実施しました。今後とも、心の健康をサポートする環境づくりや温かい人間関係の構築に向けて、連携を深めながら進めていきたいと思います。

養護学校では

附属養護学校教諭　和田 充紀

養護学校は、創立30周年を迎え、11月２日に、富山大学黒田講堂で記念式典を行いました。式典では、大学学長と人間発達科学部長からの挨拶や、芸術文化学部長からの記念品披露をしていただき、教育活動の功労者への感謝状贈呈などを行いました。また、記念公演として「ロバの音楽座」による楽しく素晴らしい演奏が行われました。大学関係者をはじめ、本校の関係者、本校の児童生徒、教職員など、合わせて200人以上の出席があり、厳粛かつ盛大で、心に残る記念式典を行うことができました。30周年の記念式典の準備および実施にあたり、これまで本校に関わってくださった人たちの思いや歴史を知り、また、現在も多くの人たちに支えられていることへの喜びを改めて感じました。

児童生徒も、自分たちの学校の歴史を振り返る学習を行う中で、昔の写真を見て驚き、話を聞いて感激する場面が多くみられました。自分たちの知らなかった歴史を知ることで、たくさんの人たちの努力や思いを感じ取ることができ、周りの人への感謝や学校を大切にしようという気持ちも高まったように思われます。

今回、10周年・20周年の時と同様に、記念誌「あゆみ」も編纂しました。この誌題に込めた「決して焦らず、一歩一歩確実に大地を踏みしめながら、子どもたちと共に力強く歩んでいこう」という願いを、これからも実践と研究に生かし、そして大学とのさらなる連携を大切にして、次の40周年へとつなげていきたいと考えています。

報　告

ビジュアルトライアスロン2006

センター助教授　小川　亮

11月24日（金）18時から同26日（日）の16時まで、研究実践総合センター１階の教育実践演習室にて、ＶＴ2006が開催されました。ビジュアルトライアスロンは、46時間の時間的制約の中で、映像の企画、作業計画、撮影、編集、音楽作成、仕上げをすませ、発表会に間に合わせるという、映像作成の活動を通して総合的な学習場面を作る試みです。延べ25名の学生が５つの班にわかれて参加しました。今年は、研究実践総合センターに導入された授業評価システムを活用して、充実した作成環境を実現することができました。

実際、参加した学生たちは、作品を作りながら、グループ内で話し合い、調整し、役割分担し、協力して作品を仕上げていきます。まさにプロの映像作成現場の難しさ厳しさを学びながら、技術をレベルアップする貴重な体験を得ることができるのです。講師には、渥美聡子さんに来ていただき、やさしくきびしく、プロの道を指導していただきました。活動記録については、メディアコミュニケーション研究室の上山先生のWebページに掲載されています。作成された作品については、下記のページで公開されています。

上山研究室 http://mmart.edu.u-toyama.ac.jp/~kamiyama/sub.php?cid=vt06

渥美さんの熱い指導

迷ったときに渥美だのみ

各班２台のマックを使って、
相談しながら映像と音声、静止画の編集

作品の出来を確認しあいながら

報　告

講演　「エコロジーは人間を救えるか」

センター助教授　小川　亮・人間発達科学部助教授　林　　衛

2007年１月13日（土）午後，本学黒田講堂会議室にて，実践センターほかとの共同主催事業として新春特別講演「エコロジーは人間を救えるか：幸せを運ぶコウノトリ放鳥２年目の報告を中心に」が開催されました。この講演会は、同時にサイエンス・ライティング映像講座インタビュー実習ならびに科学技術コミュニケーション実践セミナーの第3回としても位置づけられるものです。講師は，兵庫県豊岡市で，コウノトリの野生復帰に取り組んでいる池田啓氏（兵庫県立コウノトリの郷公園研究部長・兵庫県立大学教授，写真）です。

テレビや新聞での報道もあり、聞いたことのある方も多いと思いますが、野生のコウノトリは1971年にいちど日本から絶滅してしまいました。そのコウノトリを飼育によって増やすだけでなく，採餌や繁殖などができるよう訓練を重ね，2005年には放鳥できるまでになりました。

池田氏は、人間が壊してしまった環境を，放鳥されたコウノトリも人間も住めるような形で現代に再生・創造していくための，学校教育や無農薬農業，ボランティア，NPO 育成などの，住民と地元企業が理解を深めながら進めているさまざまな試みを紹介し，富山での持続可能な地域づくり（＝まさに科学コミュニケーションによる環境社会デザインそのもの）への具体的なヒントを示してくれました。

当日は学内の学生，教員だけでなく，富山県内で環境教育，自然観察・保護活動に取り組んでいる方々にも多数お越しいただいて，90分余りの講演と，休憩をはさみ，本学理学部にてモグラの保護を研究する横畑泰志助教授からのコメントを含む30分余りの質問時間を，合わせて80名を超える参加者が楽しみました。

なお，本新春特別講演は，12月から２月までの日程で進められている「サイエンス・ライティング映像講座」（学長裁量経費による）の一環でもあります。完成した作品は，以下のページからリンクされる予定ですので，どうぞご期待ください。

上山研究室 Web ページ http://mmart.edu.u-toyama.ac.jp/~kamiyama/
【参考】コウノトリの郷公園サイト http://www.stork.u-hyogo.ac.jp/

報　告

国際理解教育・開発教育研修会

センター教授　田尻 信一

国際理解教育・開発教育研修会が、富山県教育委員会と国際協力機構北陸支部の後援を得て、平成18年11月３日（土）に人間発達科学部多目的教室を会場に実施された。今年度の研修会は、午前、午後の２部形式で行われた。午前の部では、２つの研究発表が行われ、また午後の部では、同志社女子大学教授の藤原孝章先生を講師に迎えてのワークショップが実施された。

セクション1（午前の部）

講師：窪木靖信氏（富山大学学生・NGO インドネシア教育振興会代表）

「インドネシア教育支援のボランティア活動を通しての教材開発」

田尻信一（人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター教授）

「ケータイを使っての多文化カルタ作り」

セクション２（午後の部）

講師：藤原孝章先生（同志社女子大学教授）

「地球的課題と私たちのくらし　ーマレーシアの油ヤシ・プランテーション開発を題材にー」

今年の研修会では、従来の講演会から研究発表と講演会をあわせた形式に改めるとともに、国際理解教育や開発教育で開発された多様な教材や教育方法を参加者に体験して頂くことに主眼を置いた。当日は県内の小・中・高校教員や富山大学生など34名が参加し、活発な意見交換や活動が行われた。また、学生の中には、韓国やインドネシアの留学生も見られた。参加者からは、次のような感想が寄せられた。

○ワークショップの経験が少なく少し不安もありましたが、内容が分りやすく楽しめるものでした。事前の準備や資料もそろっていた点も助かりました。今日のように、いろいろな世代や国、違った職業の方々が集まり、国際理解教育や実際に教材を使って活動できたことがとてもためになりました。（富山大学生）

○開発教育に興味があり、担当する社会科授業でも、一度「パーム油」を使った授業をやってみました。その時は無理矢理にこじつけた面がありましたが、今回、藤原先生の実践についてお聞きし、大変参考になりました。次回の実践では、今回のお話を参考にしていきたいと思います。（中学校教員）

○日々の忙しさからつい単調な授業をしてしまっていることに気づき、この研修会に参加させて頂きました。写真を使った話し合い、ケータイの使用など、少し準備すれば授業に使えそうで、たくさんのヒラメキを頂くことができました。パーム油の実践は、一から授業をつくることは難しいので、今回教えて頂いたものを一度私なりにアレンジして実践してみたいと思います。本日はとても参考になりました。（高校教員）

報　告

子どもとのふれあい体験

センター教授　田尻 信一

今年度の「子どもとのふれあい体験」は、次の６つのコースで実施された。

①科学で遊ぼうコース（担当教員：市瀬和義先生）

②ものづくりコース（担当教員：竹井央先生）

③遊び援助コース（担当教員：小林真、生田貞子先生）

④学習困難を示す子どもの援助コース（担当教員：武蔵博文、水内豊和先生）

⑤野外活動コース（担当教員：広瀬信、黒田卓先生、田尻信一）

⑥不登校児童生徒への支援コース（担当教員：稲垣応顕先生）

一年間の活動成果を発表し、その経験を参加者全員が共有することを目的に、「子どもとのふれあい体験交流発表会」が、２月21日（水）に人間発達科学部第５講義室で行われた。当日は、受け入れ施設の担当者などをお招きして、学生135人が参加した。パワーポイントを使った発表や楽しいパフォーマンスなど、３時間半に及ぶ発表はどれもすばらしいものであった。どの発表からも一年間の充実した活動の様子がよくうかがえた。また、発表会の様子が21日のNHKニュースで放映された。

「子どもとのふれあい体験交流発表会」の企画と運営は、すべて各コースから選出された学生によって組織された実行委員会によって行われた。実行委員会は委員長の水野奈央さんを中心に17名で構成され、11月から準備を開始し４ヶ月にわたって活動した。またその間、初代実行委員長の田中謙（教育学部３年）君が実行委員会に協力し、助言してくれたことに感謝する。

「子どもとのふれあい体験」の活動に対して、学生達から以下の感想が寄せられている。

○**（科学で遊ぼうコース）**準備や後始末は大変だったが、子どもたちの笑顔を見ることができたので、やってよかったと思った。子どもたちに教える側に立つときは、その分野のみの知識だけを持つのだけではなく、いろんな分野に関連づけて教えることが大切だと思った。

○**（ものづくりコース）**思った以上に子どもたちと触れ合えてよかったし、楽しそうな子どもたちの姿を見ていたら、やってよかったと思った。子どもの笑顔や何気ない言葉はすごい力を持っているなあと思った。

○**（遊び援助コース）**遊びを通して子どもたちと親密になれると思ったので選んだ。また講義だけではわからない子どもたちとのコミュニケーションの取り方を直接学ぶことができ、「こんなときは、このようにしたらよい」と判断できるようになれると思ったので選んだ。

○**（学習困難を示す子どもの援助コース）**「ゆうの会」では,大変なこともあったけれど,先輩や子供達からたくさん大切なことを学ぶことができた。一年を通して同じ子供達と接することで,子供達の成長が感じられるし自分自身も成長することができたと思う。この体験は忘れられない宝物となった。

○**（野外活動コース）**キャンプに参加する前は「自分に子どもたちをきちんと指導できるのか」と不安だったが、実際、子どもたちと仲良くなれ、とてもやりがいがあった。勉強だけでは得られない大切なことをいろいろと学べたことが収穫であった。

○**（不登校児童生徒への支援コース）**子どもたちは、感受性が強く、私たち以上に周りを見ている。したがって、こちらの戸惑いや自信のなさがそのまま伝わり、子どもたちを不安にさせてしまうと思った。そうならないために、事前にしっかり準備をして、自分も無心で楽しむことが一番よいと思った。

報　告

富山県教育委員会との連携

センター長　市瀬 和義

今年は、富山県教育委員会との連携がいちだんと進んだ年であった。

平成18年３月24日富山大学と富山県教育委員会は包括的な連携に関する覚え書きを交わした。その内容は以下の通りであり、着実に実施され、成果が上がってきている。

現職教員の再教育機能の充実

- 富山県総合教育センターへの大学教員の派遣（客員教授７人）
- 県教委研修への大学教員の派遣（11年次研修、９講座11人）
- 大学への客員教授の派遣（県総合教育センターより１人）
- 内地留学生の受け入れ（６人）

教員養成機能の充実

- 学びのアシスト（学生派遣66人）
- 学びのアシスト・サマーキャンプ（学生16人）
- 心のサポーター派遣（学生17人）
- 特別支援スタディ・メイト
- とやま学の開講

私の担当した「学びのアシスト・サマーキャンプ～災害が起こる前に～」は、教員をめざす学生と児童がともに野外活動をすることにより事業の企画や運営を通して子どもたちの姿に学び、将来の教員としての資質を高めることを目的に、平成18年8月22日（火）・23日（水）、呉羽少年自然の家で行われた。成果としては、学生が企画段階から大変よく頑張り、初期の目的が達成された。また災害をテーマに学校ではできないことにとりくみ、児童は勉強になった。「夏休みの研究にしたい」という児童もいた。今後、学生募集や内容展開をどうするかは課題である。

「学級担任論」／「学びのアシスト」事業

センター教授　田尻 信一

人間発達科学部は富山県教育委員会と連携し、県教委の「学びのアシスト」事業に協力し、教職志望学生の小学校への配置を決めた。それに伴い、本年度から人間発達科学部１年生を対象に新たに「学級担任論」（田尻信一、黒羽正見、松本謙一、本多信昭［客員教授］の４名が担当）を開講し、同講座の受講生を配置した。「学級担任論」では、「学びのアシスト」事業への参加を通して、配置校児童の学習意欲の向上やつまずきの解消を図るとともに、教職志望学生の資質・能力の向上をめざすことを目的としている。

今年度は66名の学生が県内38校の小学校に配置され、学生は、年間30日から40日、配置校の指導 教員のもとで継続的に活動を行った。同事業に対しては、テレビや新聞でも報道され、県民から高い関心と期待が寄せられている。また、受講生に対して継続的に実施しているアンケート調査（９月、11月、１月、３月実施）でも、子どもとのふれあいや配置校の教員との交流を通して教員になりたいという気持ちが次第に高まってきたという結果が出ている。「学級担任論」／「学びのアシスト」事業は、地域との連携を目指した大学の新しい教員養成システムとして重要なものと言えよう。

報　告

平成18年度日本教育大学協会北陸地区会教育実践研究指導部門

センター助教授　稲垣 応顕

今年度の表記大会（通称、北陸二部会）は、平成18年10月23日（月）に新潟大学で行なわれた。この会への参加大学は、富山大学、新潟大学、上越教育大学、金沢大学、福井大学、信州大学、である。本学実践センターからは、田尻教授、小川助教授と私（稲垣）が出席した。本会の会長である上越教育大学の南部教授の挨拶に続き、各大学からの承合事項として、教育実習のあり方、フレンドシップ事業（本学実践センターからは、子どもとのふれあい体験）について、教員採用試験合格に向けての取り組み、相談事業の内容と位置づけ、事務系職員の実態、各種ＧＰの動向、などの情報交換が行なわれた。また、引き続き協議事項として行なわれた各大学の状況説明や意見交換では、大学再編・法人化の中の大学におけるセンターの役割・附属学校園に対する役割、教育委員会との包括的連携をどのように進めていくか、教員養成機能の充実にむけた取り組み、などがテーマとして出された。

第69回教育実践研究関連センター協議会

センター助教授　小川　亮

平成18年11月２日（木）京都駅前の「キャンパスプラザ京都」にて上記のセンター協議会が開催された。富山大学からは、市瀬センター長、稲垣、小川が参加した。以下のような内容が協議された。

○南部昌敏会長より、センター協議会のメンバー５大学が担当校となるＧＰが採択されたことについて、５大学のみのエントリーとなったがセンター協議会のすべてのメンバーの協力のもと、成果を上げられればと考えている旨の挨拶があった。

○京都教育大学学長より挨拶があった。

○事務局より前回の議事要旨の確認、2005年度決算報告、監査報告、2006年度の決算報告の中間報告

○Apeid 2006 報告（京都教育大学　佐々木先生）　ICT を利用した教師教育や専門職開発教育の国際会議

○IT 教育支援協議会報告（東原先生）

○現代ＧＰ「教員養成のためのモジュール型コア教材開発」採択報告

今年度から３年間で教材を開発していくこと。ネット上で教材を配信し他大学で活用し評価すること。ストリーミング型で著作権保護を行うこと。本年度予算は2000万円であるが、製作費が大半である。

○各大学より新しいメンバーの紹介が行われた。

○京都教育大学教育学部教授　堀内先生　講演「教職大学院の制度設計と今後の展開」

教職大学院に対応することのメリットでデメリットについて、京都教育大学においてそのコーディネートを行っている講師の経験から、貴重な情報を得ることが出来た。特に、これまでの教育学研究科は専門性の高い教員を育成してこなかったのか、という問いかけには、教職大学院のもつ看板通りではない特性に気づくことができた。その後、活発な質疑応答が行われた。

○午後の分科会については、教育臨床部会に稲垣、教育実践部会に市瀬センター長、教育工学部会に小川が出席した。教育工学・情報教育分科会ではＧＰ関連の話題を中心に、ブレーンストーミングをして、開発する教材の内容について話し合った。

第70回教育実践研究関連センター協議会

センター長　市瀬 和義

平成19年２月13日（火）に第70回国立大学教育実践研究関連センター協議会が、東京学芸大を会場に開かれた。出席者は市瀬、尾崎、田尻、小川の４名である。全体会ではまず、「教員養成を取り巻く最近の動向」について、文部科学省高等教育局専門教育課長の永山祐二氏の講演があった。ここでは、教員の質向上の重要性を教育再生会議の議論の中から述べられ、また、今後の教員養成・免許制度の在り方、教職大学院制度の話などがされた。鹿児島大学の狩野浩二氏からは「教員免許更新制について」の話で、反対意見もふまえながら具体化されている例も示され興味深い内容であった。続いて APEC、各部門報告があり予算が了承された。午後はワークショップ形式の討論が行われ、センターが抱える問題とこれからの在り方について４つのグループで話し合いがなされ、それぞれの結果を報告しあった。センターの仕事が拡大されている、センターの事業の不明確さ、理解不足などが浮き彫りにされた。今後、センターでしかできないこと、大学での横断的マネージメントなど新しい方向が示された。その後分科会に分かれて討議をした。これは主として現代 GP で作られたモジュール型コアをどうするかという問題が主であった。今回の会議はセンターがどうあるべきかを真剣に考えた会であったと思われる。

業務報告

センター日誌

平成 18 年度の実践センターの主な行事

平成１８年　４月　６日　センター会議（第１回）
５月　８日～９日　教育実習事前指導
１６日　センター会議（第２回）
２３日　センター会議（第３回）
２５日　センター運営会議
６月１５日　センター会議（第４回）
７月　１日　第５回発達と臨床の心理学講座
１４日　センター会議（第５回）
１９日・２６日　教育実習事前指導
９月　１日　教育実習事前指導
５日　センター紀要編集委員会（第１回）
１３日　センター会議（第６回）
２８日　センター紀要編集委員会（第２回）
１０月　４日　教育実習事後指導
１３日～１４日　日本教育大学協会全国教育実習研究部門研究協議会（千葉大学）
１８日　センター会議（第７回）
２３日　日本教育大学協会北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会（新潟大学）
１１月１日～２日　第６９回国立大学教育実践研究関連センター協議会（京都教育大学）
３日　国際理解教育・開発教育研修会
１１日　富山市中学生懇談会
１５日　センター会議（第８回）
１８日　第６回発達と臨床の心理学講座（１）
２４日～２６日　ビジュアルトライアスロン2006
１２月　２日　第６回発達と臨床の心理学講座（２）
１３日　センター会議（第９回）
２２日　センター紀要『教育実践研究』創刊号（通巻２３号）発行
平成１９年　１月１０日　センター会議（第１０回）
１３日　環境教育講演会
３１日　教育実習運営協議会
２月　７日　センター会議（第１１回）
１２日～１３日　第７０回国立大学教育実践研究関連センター協議会（東京学芸大学）
２１日　「子どもとのふれあい体験」体験交流発表会
３月　５日　センター会議（第１２回）
３１日　センターニュース創刊号（通巻23号）発行

編集後記　今号は、人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター・Center News 創刊号（通巻23号）として発行致します。また今号では、人間発達科学部前教授の佐伯眞人先生にお願いしてセンターニュースのために３枚の絵を書いて頂き、掲載致しました（1、4、9頁）。佐伯先生には、感謝致します。　（田尻信一）

印　刷　平成19年３月31日
発　行　平成19年３月31日
編集発行　富山大学人間発達科学部
附属人間発達科学研究実践総合センター
代表者　市瀬　和義

〒930-8555　富山市五福３１９０
電　話　０７６－４４５－６３８０